

TRIP Racing

2022 MFJ全日本ロードレース選手権シリーズ 第7戦 SUPERBIKE RACE in OKAYAMA Race Report

國峰啄磨がトップを快走するも悔しい2位
清成龍一と國川浩道は共に6位フィニッシュ



2022年9月17日（土）公式予選 天候：曇り コース：ドライ
18日（日）決勝 天候：曇り・雨 コース：ドライ・ウエット
観客動員数：5050人（2日間合計）
岡山県・岡山国際サーキット 1 3.747km

ST1000

#29 國峰啄磨

予選3番手（タイム：1分32秒166）決勝：2位

#31 國川浩道

予選10番手（タイム：1分33秒734）決勝：6位

JSB1000

#3 清成龍一

予選8番手（タイム：1分32秒618）決勝：6位



全日本ロードレース選手権第7戦は、東広島のTOHO Racingにとってホームコースである岡山国際サーキットでの開催となった。2022年シーズンも今回を含めて残り2戦。走り込んでいるコースで流れを引き寄せたいところだった。

実際、前週に行われた事前公開テストでは、國峰啄磨が好調で常にトップタイムをマーク。國川浩道も3日目のトップタイムをマークするなどTOHO RacingがST1000クラスをリードしていた。清成龍一は、スプリント2戦目ということもあり、マシンセットをいろいろ試しながら、方向性を探る作業を続けていた。

レースウィーク初日は、真夏のような暑さとなり路面温度も50度近くまで上昇していたが、その中でも國峰は速さを見せ、1回目に1分32秒939を記録しトップ。2回目は、マシンセットを進めたためタイムは更新できなかったが、まずまずの出だしとなっていた。國川も9番手につけ、さらに上位を狙っていた。

土曜日ドライコンディションとなり公式予選では激しいタイムアタック合戦が繰り広げられた。ST1000クラスのセッションをリードしたのは國峰だった。セッション序盤のタイヤの状態がいうちにタイムを出しにいった國峰は、1分

32秒166までタイムを縮め、コースレコードでポールポジションを獲得する。國川も自己ベストを更新する走りで10番手につけた。

JSB1000クラスの公式予選はノックアウト方式で行われ、まずは全車が出走するQ1が始まる。清成はマシンセットを進めながらセッション終盤に1分32秒680を出し、8番手でQ2に進出。Q2でもアタックというよりは、アベレージを上げる作業を行いセッション最後に1分32秒618を記録し8番手と3列目からスタートすることになっていた。

決勝日は大型の台風14号が接近しているため、観戦にいられている方やレース関係者が安全に帰宅できるように各クラスの周回数を変更し、1時間前倒しで終えるスケジュールに変更された。

夜のうちに降った雨により朝のウォームアップ走行は濡れている状態で始まった。J-GP3クラスの次となったST1000クラスは、まだまだ路面は乾かず中途半端なコンディションとなっており確認程度のセッションとなっていた。

ST1000クラスは、18周から15周に減算してレースが行われた。國峰は、ポールポジションから好スタートを切りホールショットを奪うとレースをリード。アタマ一つ抜け出す形で、高橋選手と渡辺選手という2人のチャンピオンを従えて周回を重ねていく。しかし、予選まで、いい状態だったマシンに少しの違和感を感じていた。そのため、思っていたよりもペースを上げることができず、レース終盤になると背後には高橋選手をかわして渡辺選手が迫ってくる。何とか逃げ切ろうと最後の力を振り絞る國峰だったが、バックマーカーに引っかかり、一気に、その差を縮められてしまう。そして、残り2周を切った14周目の1コーナーで渡辺選手にかわされ2番手にポジションダウン。何とか抜き返そうと試みるものの、勝負するところまでいくことができず悔しい2位。シリーズランキングでは、渡辺選手と同ポイントの暫定トップとなり、鈴鹿最終戦で決着がつくことになった。

JSB1000クラスは、24周から20周に減算して争われた。清成は、スタートでやや遅れてしまいオープニングラップは9番手で戻ってくる。序盤は加賀山選手、秋吉選手という先輩ライダーとのバトルとなり、なかなかかわせないでいる。8周目に加賀山選手を、11周目に秋吉選手をようやくかわすと、前を走る亀井選手に追いついていく。レース終盤には、その差は1秒ほどに縮まるが、かわすまでは至らない。しかし、最終ラップに前で1台が転倒したため6番手に上がると、そのままゴール。6位入賞で岡山ラウンドを終えることになった。



清成龍一

「チームのホームコースですし事前テストの感触から“今回は戦えるかな”と思っていました。あと少しというところなんですが、なかなか自分の走りも、求めているフィーリングも見出せず、もどかしいレースとなってしまいました。その中で、ホームコースだからこそ、いろいろ試しながらチャレンジすることができましたし、確実に前進はしています。データもそろってきているので、最終戦鈴鹿で、みんなでやってきたことを形にしたいですね」

國峰啄磨

「事前テストから公式予選までの、いいフィーリングが決勝では、少し変わってしまっていて、そのコンディションに合わせきれなかったことが敗因です。たればですが、バックマーカーがスピードを落として譲ってくれていたのですが、それをうまくかわせなかった場面もあり、それがなければ逃げることもできたかもしれません。チームのホームコースで勝つために努力してきたのに残念な結果になってしまいました。それも自分の実力不足と反省し、最終戦鈴鹿で勝って終われるように全力を尽くします」

國川浩道

「たくさん練習させていただき、トップ争いを目指していましたが不甲斐ない結果に終わってしまいチームに申し訳ない気持ちです。想定していたタイムにも届きませんでしたし、スピードが足りませんでした。その中でも、よかったこともあり、レース後半は、前に追いついていくことができました。序盤の走りが改善できれば、もっと上位でゴールできたと思うと悔しいですね。その分、最終戦鈴鹿でトップグループに食らいついて行って結果で恩返ししたいですね」

戸井田剛

「事前に練習をある程度できていたので、レースウイークの入りは悪くなかったと思います。國川選手は、レース終盤に追い上げて6位と健闘しました。國峰選手については、前回のオートポリスと同じような負け方だったので、本人も理解はしていると思いますが、レースの組み立てる部分で優位性を見出して最終戦は勝てるように準備したいですね。清成選手はスプリント2戦目でレースを使って、いろいろ試している状況で徐々にベースセットができていますし、体調もどんどん回復しているので、鈴鹿はみんなでいいレースにして締めくくれるようにチーム一丸となって挑みます」

チーム監督

福間勇二

「今回も多くの方に応援に駆けつけていただき感謝いたします。ホームコースである岡山国際サーキットで勝つことを目指していましたが、國峰は、あと一歩足りませんでした。ライバルの速さを認め、それに勝つことを考えて、次戦最終戦鈴鹿で最高の結果を残せるようにチーム全体でバックアップしていきます。清成も、まだスプリント2戦目ながら調子を上げてきていますし、國川も前回に続き6位入賞と健闘しました。いい報告ができるように引き続き努力を続けます」

このリリースに関するお問い合わせは
TOHO Racing 担当：國川まで

